

刊行にあたって

本書『こころの病気と歯科治療』は、なぜ「心の病気」ではなく「こころの病気」なのであろうか。

夏目漱石の代表作『こころ』はご存知であろう。高校生のときに妙に感動して読んだ記憶がある。なぜ「心」ではないのであろうか。実は初版本の箱の背には「心」、表紙の背は「こゝろ」（こころではない）、序の記述では「『心』は大正三年四月から……」とあり、本文の題字は「こゝろ」、奥付の後の広告には「心（著者装幀）」とある。つまり、漱石自身はどちらでもよかったようである。しかし、題名を「こころ」とすることで、この作品の謎めいた深さのようなものがさらに強調されて、作品の魅力向上に一役買っているのは間違いない。

「心」は、シンとも読めて心臓疾患も連想できるため、精神的な側面であることを理解してもらうためには「こころ」が適切であると思われるが、文学的な香りもして親しみやすい。

漱石は『こころ』の広告文で、「自己の心を捕らえと欲する人々に、人間の心を捕らえ得たるこの作物を奨（すす）む」と記している。愛情と憎悪に発した罪悪感に悩む主人公の抱く人間のエゴと葛藤は、本来人間であれば誰にでもある生理的なものであるが、「こころの病気」との線引きは難しい。

「こころの病気」を治すのは歯科医の専門分野ではないが、口腔疾患の専門家として、こころの病気を発症要因とした口腔疾患は避けて通れない。また、「病気」ではなく「患者」と対峙する以上、必ず「こころ」は関与してくる。ある歯科医院での例であるが、クラウン（歯冠補綴）治療の際に、形成、印象採得、最終調整までは信頼関係のある院長が担当してくれたのに、セメント合着だけ若い研修医が担当したことで不安になり、咬合違和感と締め付けられるような痛みを発症した症例があった。もし研修医がセットした後に、院長が最終チェックを行って「よし、完璧！」と一言でもあれば、あるいは会計時に受付で「まあ、きれいな歯が入りましたね。よかったですね」とでも言っていれば、発症しなかったかもしれない。患者を治すということは、こういうことかもしれない。

人生経験豊富な歯科医であれば自然に具備できていることかもしれないが、若い先生は、医療知識として医療技術として歯科治療に必要な「こころ」の習得が必要である。本書がその一助になれば幸いである。

編集委員一同

平成30年2月